

## 【エッセイ・回顧】

## 丸山薫先生を偲んで—詩と音楽の融合—

愛知大学文学部文学科 昭和 62 年卒 久野 かおる

## 1. はじめに

本稿は拙稿「丸山薫先生を偲んで—師の印象と学生への温情—」（愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『同文書院記念報 VOL.29』所収 2021 年 3 月）の続編である。

昨年 10 月に、拙稿でご紹介した丸山薫先生と学生サークル（文学研究会）で交流のあった清水宏子氏（愛知大学名誉教授清水一嘉先生の奥様）からお便りを頂戴したのだが、そこに「学生時代に男声合唱団に所属していた人に、丸山先生の詩『アイルランドのような田舎に行こう』に曲をつけた唄を歌ってもらったことがありました。懐かしい思い出です。」と書かれていた。これは丸山薫先生の詩「汽車にのつて」の言葉「あいるらんだのやうな田舎へ行かう」のことだ。そうだ、丸山薫先生の詩は合唱曲として歌われている、調べてみようと思ったところ、『丸山薫全集 5』（角川書店 1977 年）所収 1965 年 9 月 7 日付高野宏子様（前述の清水宏子氏旧姓）宛書簡（p.211）に、『汽車にのつて』は第三番目に出来た詩です。愛大のコーラス部でもやっていたらしいが、これも恥かしくてききにゆきませんでした。」とあった。

また、『四季 終刊 丸山薫追悼号』（潮流社 1975 年）所収、城山三郎「大きな死」（p.189）に以下の記述があった。丸山薫先生のご葬儀でのことである。

丸山さんが自作の詩をふきこんだ録音テープの音が、会場に流れた。質の高い丸山さんの詩の中で、比較的わかりやすく、ポピュラーな詩。「汽車に乗って あいるらんだのやうな田舎へ行かう ひとびとが祭の日傘をくるくるまはしー」雲に乗った丸山さんの大きな体が、地球から遠ざかって行く。

本稿では、丸山薫先生の「詩」と「詞」に対する思いに触れ、先生が作詞された校歌や唱歌、先生の詩に曲を付けた合唱曲について先生ご自身はどのようなお気持ちであったかを探る。さらに、愛知大学男声合唱団 OB の方から伺った先生との思い出も紹介する。

## 2. 詩と詞

## 2-1. 「作詩と作詞」

丸山薫先生は詩人として歌の詞を作ることにはかなり葛藤されていたようだ。

例えば、『丸山薫全集 4』（角川書店 1977 年）所収「作詩と作詞」（p.376—p.378）に「作詞はいつの場合も私にとって甚だしく労力の要る困難な仕事になってしまう。」と述べ、「理由は、現代の詩が形式内容ともに、もはや口ずさみ或は歌う詩から遠い距離に在るポエジイという文学に属しているからであるのだ。つまり問題は定型詩と自由詩（一というより新しい散文詩）との間のギャップ

ということに帰着する。」と記されている。さらに、次のように続けている。

作曲技術の進歩によって、現代ではどんな自由形の詩でも曲に乗せることは可能であろう。だがオペラは別として、一つの独立した歌曲として歌われる場合、その歌詞はなんらかの意味で定型詩なのである。しかもこの定型詩であるということが、ただ詩の形式だけの問題に止まらず、詩の内容までを規定してしまうのである。つまり、感情流露の詩を書かねばならないことになる。そしてそのことがまた、極力感情を押えてイメエジにふくらみをもたせる詩的手法に慣らされている私に、作詞がひどくやりにくくて骨の折れる理由となるのである。いや、私ばかりでなくて、これは凡そ現代詩を書く詩人が作詞に当ってひとしく感じる難点だろうと思う。(中略)

私たち詩人の理想を言うなら、歌のための作詞ではなくて、詩として書いたものに曲をつけて欲しいのだ。だが実際に耳で聴いてみて、多少の例外はあるとしても、詩を作曲した歌は面白くない。やはり、歌は詩と違い、詩は歌ではないのが現状である。加えて、多少でも校歌やラジオの歌を作詞した体験から、次のようなことだけは解った。つまり、作詞も作詩も共に新鮮を競うべきではあるが、歌の場合はあくまでも感情に発想し、言葉も感情に添って流れねばならぬということである。ウラを返して言うなら、詩のように批評精神に立って発想されたり、言葉に暗喩

やイメエジをもたせることを第一義にしたりしてはならないということである。

## 2-2. 海、船、北国の子供たち

後述する合唱曲には先生の詩から特に、海、船、北国の子供たちを取り上げた作品が選ばれている。

丸山薫先生が船乗り憧れ、実際に船旅を楽しんでいたことは作品からもよくわかり、先生の作品に少なからず影響を及ぼしている。

『丸山薫全集 4』所収「海の文学」(p.268)に次の記述がある。

私の好きな海の文学作品はたくさんにあった。デフォーの『ロビンソンクルーソー』やスチブンソンの『宝島』、コンラッドの『青春』や『タイフーン』や『ナーシサス号の黒人』、モーパッサンの『水の上』、ロチの『お菊婦人』、ポーの『渦巻』、メルビルの『白鯨』、ジャック・ロンドンの幾つか、さらにイバニエスの『五月の花号』、ヘミングウェイの『老人と海』等々。だがそれらはどれも外国作家のものであり、私の書かねばならぬのは日本の作家の海の文学についてである。

そんな私に真っ先に思い浮かぶのはなんととっても米窪太刀雄の『海のロマンス』であった。練習船大成丸の一実習生によって書かれた、明治末年から大正初めに<sup>またが</sup>跨るこの世界一周帆走航海記は、その断片が朝日新聞上に連載され多くの青少年のゆめを私と共に<sup>はる</sup>かな大洋のかなたに誘った。それにつ

づいて想い起こされるのが、同じ著者による『船と人』であり『マドロスの悲哀』だった。

『四季 終刊 丸山薫追悼号』所収、日塔聰「丸山薫断想」(p.60)に次の記述がある。

丸山さんは、海の男たちのキビキビした動作が好きだった。号令がかかると、練習生たちは「サー」と答えて一斉に行動に移る。「これは日本語の”さア”じゃなくって、英語のイエスサーの”サー”だったんだよ。」と、いかにも愉しそうに話していた。波を蹴立てて大きく弧を描く艦列一眼を細め、夢みるように、観艦式の素晴らしさを語ることもあった。そんなふうには規律ある集団行動が好きだったから、山の学校の先生になっても、子供たちの操縦は予想外にうまかったようだ。

『丸山薫全集 4』所収「春来るまで」(p.160-p.162)には山形での教員生活、雪深い山村での生活、子供たちの様子などが記されている。

### 3. 丸山薫先生と音楽

丸山薫先生はどのように音楽と関わっていらっしやっただろう。ここでは先生と音楽との関わりに注目してみる。

#### 3-1. 楽器や歌など

丸山薫先生の詩には「オルガン、手風琴、ドラム、フリユウト、鼓、太鼓、ビオロン、喇叭(ラッパ)、クラリネット、トランペット」などの楽器が登場するが、以下のような表現が興味深い。

桑原武夫他編『丸山薫全集 3』(角川書店 1976 年)所収、「津村信夫を悼む」(p.164)では「その自己流に吹いた トランペットの獨奏のやうな三十六年の生涯は」と表現している。同全集所収「雪の中」(p.180)では「雪の中で歌つたら 雪は口にまひこんだ」、「言はざるもの」(p.192)では「ああわれは詩人なるかな 人の世のメロディは知らず」、「英雄交響曲」(p.397)では牡ライオンに対し「制服の少女がふたり ささやいていた 一立派ね まるでベートーベンみたい 一いいえ ベートーベンの音楽みたいよ」、「大漁」(p.506)では「エンジンの音は太鼓のようだ」とある。

また、桑原武夫他編『丸山薫全集 2』(角川書店 1976 年)所収「雨の日」(p.52-54)では小学校の小使いさんがふるりんの音を聞いた子供たちが元気に走り回り、壁や天井や窓ガラスなどが「わらん わらんと 歌い出す」、子供たちも「わわわん わわわん と 歌い出す」とし、いかにも楽しそうな擬音語を使って表現している。

さらに、「君が代」(p.435)では「つづくサザレ のあたり にわかにか<sup>とどろ</sup>轟くドラムの一打に 胸はゆすられ 熱くなるのだ」、「世界」(p.207)では聴診器から「それ それ 流れ出る 讚美歌のこえが」としている。桑原武夫他編『丸山薫全集 5』所収 1973 年 5 月 7 日付河合智恵子様(東京都の詩人)宛書簡 (p.283)に、「詩篇の感想にはなりません、しづかで、そして強いパイプオルガンの余韻を心にのこしました。」とある。このような表現には先生の音に対するイメージが表れていると思う。

ところで、先生ご自身も楽器を嗜まれたようで、同書所収 1946 年 12 月 7 日付小山

正孝様（神奈川県川崎市の詩人）宛書簡（p.119）に、「さて、深山ぐらしも二年目の冬を迎えました。いよいよ昨日から、半年を封じ込める雪がふり始めました。さびしいときには学校のオルガンを弾いてこゝろなぐさめてみます。」とある。

また、同書所収 1948 年 10 月 3 日付吉沢久左エ門様（山形県岩根沢の人）宛書簡（p.110）には次の記述があり、楽器や音楽は先生の身近な存在だったと思われる。

私の部屋は立派な庭園と茶室に面し、隣室にはグランドピアノが時折ショパンやベートーベンを奏で、二つの電蓄が好きなときに音楽やニュースをきかしてくれるのですが、いま一度、あの深い谷と遠山の眺めを一望にするあなたの蚕屋（まご）の二階に住みたいものだと、時折、妻と話し合つてみます。

さらに、同書所収 1973 年 8 月 29 日付大谷正実様（岩根沢国民学校訓導）宛書簡（p.170—p.171）には次の記述があり、先生はいろいろな音楽を楽しまれていたようだ。

みちのくの深山に近き岩根沢よき人住めり忘れ得ぬさと この歌を、あなたといっしょに、啄木の歌のメロディにのせて時折合唱したものでした。いまにして思えばメロディに少し誤りがありましたが一。また歌の作者、いまは亡き小西先生も聞きましたっけ。（中略）たゞ、新聞とテレビだけは首っ引きの彼女（いや、老婆）、私は私で、疲れればステレオで民謡やポピュラークラシック、さらには五木ひろし、石橋正二、

バタヤンまでを聴くといったわが家の日常です。

岩本晃代・安智史編『新編丸山薫全集 6』（角川学芸出版 2009 年）p.565「思い出」に次の記述がある。ハーモニカも先生にとって心を癒す楽器だったようだ。

濱松とし聞けば楽器會社といえはすぐにハーモニカを想い浮べる。なにも「日本楽器會社」はハーモニカだけを造つているわけではなく、楽器はそれだけに限らないのだが、なぜか僕にはあの小さな形や明るい音色が聯想される。音楽に疎遠な僕にそうである位だから、ハーモニカこそ楽器中での一番大衆的なものだろう。（中略）

ハーモニカは玩具のように可愛く、ピカリと光つてポケットにも納るところが良い。少年のあこがれを唆るあの「波オーバー・ザ・ウェーブスを越えて」の一曲一僕のような詩人にとって、老いてなお懐しい存在である。

### 3-2. 山田昌弘氏の存在—校歌・学生歌

山田昌弘氏は愛知大学「学生歌」と「月影砕くる」（愛知大学予科道謡歌）、短期大学部学生歌「梢の歌」の作曲者であり、愛知大学男声合唱団と愛知大学女子短期大学部合唱団の指導をされていた方である。「昭和 39 年度愛知大学女子短期大学部 入学案内」（p.4）の「教員組織」に助教授（「音楽」）としてお名前が載っている。また、合唱団しじゅうから編『豊橋合唱協会 40 周年記念誌』（p.3）で豊橋合唱協会会長鈴木國雄氏が「本協会は 1956 年（昭和 31 年）に地域音

楽振興をめざして東三河コーラス同好会が山田昌弘会長のもとに発足しました。」と述べられ、山田昌弘氏が合唱に尽力されていたことがわかる。

『丸山薫全集 5』所収「作詞目録 2、校歌」(p.525-p.526) および愛知大学丸山薫の会編『丸山薫の世界』(丸山薫作品集)』(2017年)の「丸山薫作詞団体歌・校歌一覧」(p.133-p.134)を見ると、丸山薫先生作詞、山田昌弘氏作曲の校歌、学生歌が多数あり、お二人の交流が窺える。

丸山薫先生は山田昌弘氏を随分と信頼し、頼りにされていたようで、『丸山薫全集 5』所収 1950年11月2日付渡辺花子様(山形県岩根沢の歌人、詩人)宛書簡(p.121)に次の記述がある。

信時さんに作曲をとゆう話をうかがった時、実はよほどその不適當であることをあなたに申そうかと思いましたが、折角の学校当事者の意嚮を挫くようでもあり、下手に誤解を招いて中傷するようにとられてはと、控えました。信時さんが当代第一流の芸術家であり、人格高潔な音楽家で、過去に立派な仕事をたくさんに残しておられることはよく識っていますが、たゞ、中学校の校歌を作曲するには少々不器用であり、子供に魅力あるふしは決して期待出来ないと思ったからです。曲譜を持って早速に山田さん(遠い花火の作曲者で信時氏の教え子)に弾いて歌って貰いましたが、果してその懸念は当たったようです。尤も山田氏の意見では、この前の谷地高等学校のよりはよく出来ているようですが、さんび歌調で線が細く、

歌っておもしろさを感じる曲ではないとのことでした。私も同感です。唯、大家のものであるので、少しのハツタリもなくて、式場用として至極立派だとゆうことは言えるでしょう。

ちなみに上記谷地高等学校の校歌については、『丸山薫全集 4』所収「谷地の印象」(p.184)に次の記述がある。

私の作詩は谷地高等学校の持つこうした自然環境と宮本さんや小野先生にうかぶった谷地町の由緒とをモチフとして、それにいささか自分流の理想を加えることによって成立つものであることを、茲に申し添える。幸にも未熟な歌詞が信時潔氏の作曲を得て、どうにか生徒諸君の歌うに堪えるものになり得たことは欣びに堪えない。希わくは、若人達の声帯に乗ったそのメロディやハーモニーが校舎の窓から羽搏き出て、あの谷地の野風と光の中をひろがってゆくさまを、一度は耳に入れたいものである。

以上の記述を見ても、丸山薫先生は作詞に苦心されるとともに作曲についてもかなりの思い入れがあったようで、『丸山薫全集 5』所収 1950年6月5日付渡辺久兵衛様(山形県岩根沢の歌人、詩人渡辺花子様の父)宛書簡(p.117)では次のように作曲について具体的にお願いをされている。

さて、お約束の西部中学校々歌々詞、今日漸く完成しましたので、同封にてお送り致します。御高覧の上で、どうぞ

同校へお手渡し下さいますよう、お願い致します。

ごらんのように歌詞は七五調にしましたが、同じように七音になっていても(三・四)(四・三)(二・五)といろいろに分れており、その字脚を各節の該当行それぞれにそろえてゆかねば、曲になったとき歌にくい為、思う考、思うことばの半分も盛れません。まことに我ながら意に充たぬものになってしまいました。右の苦衷をお汲みとりの上、御寛容のほどをおねがい申し上げます。

尚、作曲についての希望としては

- 一、出来るだけ潑刺勇壮な曲にして  
いたゞきたいこと
- 二、各節の第二行冒頭の字脚が不揃いですから、その点を御含み下さること

です。以上、よろしくお願い致します。

先生は校歌の作詞に苦心しながらも頼まれると引き受けていらっしゃったようで、『丸山薫全集 5』所収渡辺花子様宛書簡には次の記述がある。1952年6月6日付書簡(p.126)に、「いま校歌を二つとラジオ歌謡とイラコ観光音頭と、四つの歌を書いています。」とある。また、1951年2月20日付書簡(p.123)に、「こんどは蒲郡高校の校歌をつくります。俗臭フンブンたる詩人の末路です。」とある。加えて、1953年3月7日付書簡(p.128)に、「碧南市の校長さんが校歌をつくってくれと行って坐りこんだりして、ちょっとヤキモキしましたが」、1969年2月21日付書簡(p.182)に、「焦眉の高校の校歌をひかえて、トタンのくるしみです。」

とある。

しかし、先生は引き受けた作詞に対し、その学校や子供たちに思いを巡らし、深い愛情をお持ちで、気遣いをされていた。『新編丸山薫全集 6』p.321「蒲郡南部小学校校歌作詞者のことば」(1959年)に次の記述がある。

ところで蒲南小学校の校歌だけは、学校を拝見してくると一週間もたたないうちにすらりとできあがってしまいました。まったく珍しいことですが、きっと蒲郡の町や蒲南小学校のかんじがよかったせいでしょう。(中略)一方ではまた、この学校の教育と取り組んでいられる諸先生や父兄の方たちにとって、どこかもの足りない歌詞になりはしなかったかと、それが少し心配です。

校歌・学生歌は本来その学校の子供や学生たちのためにある。それは愛知大学短期大学部学生歌「梢の歌」に表れている。「梢の歌」は2019年に愛知大学内に詩碑が建立され、詩碑の近くに設置されたパネルのQRコードから聴くことができるので、ぜひご鑑賞いただきたい。

### 3-3. 唱歌・合唱曲など

表1に先生の詩の楽曲(『丸山薫全集 5』所収「作詞目録」にあるものを除く)を示す。同じ詩が男声合唱曲となったり女声合唱曲となったりしていることがわかる。

丸山薫先生が唱歌の作詞をされていたことは、『丸山薫全集 5』所収「作詞目録 1、歌詞」(p.525)、同書所収1960年6月1日

付渡辺花子様宛書簡 (p.146) に、「しかしさすがに流感はまったく癒りましたので、このごろは仕事もよくはかどります。その一つ—36 年度の全国ラジオ唱歌コンクール (高校の部) 課題曲をたのまれて、一週間ほど前につくりました。」とあることからわかる。ちなみに、この詩は同書所収「作詞目録 1、歌詞」(p.525) の「海はこころ」を指す。前述の山田昌弘氏とコンビで作られた曲も見られる。

では、先生は唱歌や合唱曲をどのように受け止めていらっしやっただろう。

同書所収 1955 年 3 月 23 日付渡辺花子様宛書簡 (p.130) に、「コーラスアルバムについての御感想をさっそくにいたゞけて嬉しく思います。作詞者として曲とのくいちがいに少々失望しましたが、若い人々の評判はわるくなくて、ほっとしてもいます。」とある。

また、『丸山薫全集 4』所収「曲と詞」(p.380) に次の記述がある。

ステージで合唱する子供たちが、いちように顔を上下に動かし、パクパクポクポク口を開け閉じしているのを見ていると、いじらしくもあり、いささかおかしくもなってくる。

発声練習を正しくする事は、歌うについての大切な基本の一つかもしれない。コックリするのもパクパクするのも、そうした意味での先生の指導によるためと思われる。だがそれが極端に形に出ると、見ている方が苦しくなってくる。音楽は見るよりも聞くものだろうが、つい耳を忘れて眼の方がはたらいってしまうのだから仕方がない。(中

略)

小、中学校の音楽会などへ行くと、プログラムやステージの袖めくり、歌の作曲者の名前はしるしてあっても作詩者の名はしるしてない場合が多い。

「からたちの花」山田耕筰作曲とあっても、北原白秋の詩とは明示されていないごときである。これも音楽の先生のひとりよがりだと思われる。

上記からは作曲者に対する作詩者の羨望が感じられる。確かに、歌を聴くと、まず無意識に曲が自分の好みかどうか判断する。しかし、曲と詩が融合していなければ、人々の心に沁みないだろう。丸山薫先生の詩の合唱曲は、作曲者が先生の詩を選び、詩を最大限に表現したものだと思う。だからこそ今もなお演奏され、新たな楽曲が作られるのだろう。

#### 4. 丸山薫先生と愛知大学男声合唱団

ここでは山田昌弘氏、丸山薫先生と愛知大学男声合唱団との交流を紹介する。

##### 4-1. 愛知大学男声合唱団

2017 年 3 月 11 日から 25 日まで明豊ビル 2 階展示室において愛知大学男声・女声合唱団 OB・OG 主催の「愛知大学合唱団のあゆみ—資料展示会—」が開催された。以下、そのパンフレットを基に愛知大学男声合唱団について記す。

愛知大学男声合唱団は板倉鞆音教授の働きかけにより 1949 年に「コーラス部」として誕生し、後に「男声合唱団」と改名された。

前述の山田昌弘氏指導の下、1964 年 10 月 31 日に総勢 50 名を超える団員が豊橋市公会堂にて第 1 回定期演奏会を開催した。こ

の時、愛知大学女子短期大学部音楽部も賛助出演している。演奏会では、1963年1月愛知大学山岳部員13名全員の薬師岳での遭難を歌った「あゝ薬師岳」(村越利一郎作詞、山陽公一作曲)を山田昌弘氏が混声合唱曲から男声合唱曲に編曲し演奏している。

第1回定期演奏会の成功、名古屋校舎からの参加もあって団員数は71名となった。1965年9月4日には岐阜県中津川市で中津川演奏会、同年9月5日には岐阜演奏会、12月12日には第2回定期演奏会を開いた。同年には豊橋市の放送局で愛知大学「学生歌」と「寮歌」を作曲者である山田昌弘氏の指揮により録音している。

#### 4-2. 池場道明氏との交流

池場道明氏は愛知大学男声合唱団のOBで団員当時、団誌「ffフォルテッシモ」を編集されていた方である。「ffフォルテッシモ」創刊号から第3号は愛知大学東亜同文書院大学記念センターに寄贈されており、閲覧させていただいたが、池場氏の短歌はもとより団員の情熱に溢れた文章が詰め込まれていた。今回、池場氏から丸山薫先生との交流について以下の貴重なお話を伺うことができた。

私は高校時代から短歌を詠んでいたこともあり、丸山薫先生が疎開先で小学校の教員をされていた頃の詩が教科書に載っていたことは知っていました。愛知大学にいらっしゃることを知って、学部も違うし、講義を受けたこともありませんでしたが、大学構内で思い切って先生に声をかけ、自己紹介し、作品(短歌)を見ていただきました。

第一印象としては、とっつきにくさはありましたが、象のような風貌とやさしい目、肉厚な手のひらが妙に印象に残っています。

蟬川のご自宅へ伺った際には、奥さんとまるで新婚さんのようなやり取り、「君、すまないが……。」と奥さんに何かを頼む際のやり取りが印象に残っています。奥さんとのさばさばしたハイカラな関係、ちょっとしたやり取りを見て、何て素晴らしい関係だろうと感じました。夏場でしたのでスイカをいただきました。スプーンの先がとがった形でほじくりやすく、シャレタものでした。(通常はかぶりつくものでしたから。)

奥さんは出しゃばったこともなく、先生を静かに見守っていらっしゃいました。詩人の奥さんとして最高の奥さんだと思いました。

先生のご自宅には個人的悩みの相談に押しかけていました。先生には恋愛相談をしたこともあり、精神的な拠り所になっていただきました。先生がおっしゃった言葉「女性は一定の年齢に達すると、草花でも花が咲いて実が実るようにね……。」を今でもはっきり覚えています。

池場氏は丸山薫先生を心の「師」としながらも、1965年中津川演奏会に向けての合宿中に頭部に怪我をされ、先生とは疎遠になってしまったそうで、次のように話してくださいました。

先生には同人誌「ペアゴラ」を送っていたいたり、田舎のお袋に頼んで「松たけ」や「栗」を送るなどしていましたが、合唱団合宿中に頭部の怪我をして入院生活するに及び、頭痛・耳鳴りの後遺症があり、疎



遠になっていきました。

先生が亡くなった話は田舎の姉から連絡を受けて知りました。意味のある青春時代に一時関わらせていただいたこと、ご自宅まで恥ずかしげもなく押しかけていったこと、今思えばよくも勇気があったもんだと思います。

丸山薫先生は来る者拒まず、奥様も温かく迎えてくださる方だったことがよくわかるお話である。

#### 4-3. 第2回定期演奏会に来場

1965年12月12日に豊橋市公会堂で行われた愛知大学男声合唱団第2回定期演奏会では、第2ステージ「邦人作品集」で多田武彦氏が丸山薫先生の詩に作曲した男声合唱組曲「北国」より「お山の学校」、「お月様」、男声合唱組曲「航海詩集」より「キャプスタン」、「わが窓に」、「コンパスづくし」が演奏されている。選曲について、前述の池場氏は次のようにお便りに記されている。

当時学生の間で流行っていた多田さんの組曲が選ばれ、それがたまたま丸山さんの作品だったのではないのでしょうか。事実、合唱団で丸山さんを知る人はほとんどいなかったと思います。合唱団の顧問だった歌川教授や常任指揮者、山田昌弘さんの影響もあるかも知れません。

当時、それまではミサ曲が中心で、組曲への取り組みは始めてでした。小生にとっては極めて有意味な選曲であり、これで一步丸山さんに近づけるという心象でした。

今回、池場氏から演奏会場に丸山薫先生がいらっしやったことを伺い、驚いた。先生はどのようなお気持ちでご自身の詩が合唱曲として演奏されるのを聴かれたのであろうか。

池場氏は以下のことを教えてくださった。

丸山薫先生の詩を演奏することになり、こんな機会はまたとないと思ってご招待したのですが、来場して下さったのかと、ステージ上で探したところ、いちばん後ろの座席に一人おられるのを確認しました。トレードマークのベレー帽をかぶっていらっしやいました。

池場氏が先生を招待されたことは当時団長だった勝野正彦氏は承知されていたそうだが、ほかの団員は知らなかったようである。

池場氏は以下の後日談も教えてくださった。

後日、謝意を申し上げますと、「感動しました」「不思議な感じでしたよ」というような短い感想をいただきました。思えば、校歌や市歌などは「詞」ですが、組曲は「自由詩」であり、メロディには編曲が加わります。表現もそれだけ立体化していますので、丸山さんにとっては初めてのご経験だったと思います。小生も深く触れようとは思いませんでしたので、短いやり取りだったと思います。

池場氏は次のようなお話もしてくださいました。

先生の詩は「素朴な子供たち相手に詠んでるなあ。」と、詩人として生きていく覚悟を感じました。

作曲家との関係はわかりませんが、先

生の詩を無断で作曲することはないでしょうから、先生が許可されたのでしょう。先生の散文詩は詩としての美しさがあり、作曲する人の目に留まれば、歌になることはあり得ます。

残念ながら、先生のお写真も先生と撮ったお写真もないそうだが、演奏会のパンフレットも演奏を録音した CD も愛知大学東亜同文書院大学記念センターに寄贈されている。

今回、CD で当時の演奏を聴かせていただいたが、多田武彦氏は丸山薫先生の言葉を大切に作曲していらっしやると思った。「お月様」は哀愁、郷愁があり、優しいお月様のイメージである。「お山の学校」は出だしの「毎朝」にインパクトがあり、子供たちの元気で明るいイメージである。「ひっかいたり」、「しんとして」など詩の言葉を活かした曲だと感じた。当時学生指揮をされていた鈴木正隆氏は、「今でも『狼の仔の眼からも ほろほろと 円い涙の珠が こぼれ落ちました』が忘れられないそうだ。

「キャプスタン」は船上の勢い良いかけ声が活かされ、どのフレーズをリピートするか練られていると思った。また、「わが窓に」は多田氏が詩のどこをクローズアップしているか、「わが窓に」で静かに始まり「わが窓に」で静かに終わるところに神聖な海原を感じた。さらに「コンパスづくし」には丸山薫先生が船旅の中でいろいろなコンパスの名前を覚えた楽しさ、わくわく感が伝わってくる。

音の強弱、長短、刻み方、高低、緩急、抑揚、さらに転調によって詩のイメージを膨らませるなど、多田氏による詩と曲との融合は心に響く。この演奏を丸山薫先生が聴

かれたかと思うと感慨深いものがある。ぜひ CD を聴いていただきたい。ちなみに、多田氏は後に「航海詩集」を増補改訂されたが、先生の承諾は得ていたようだ。

その後 1976 年 2 月 22 日第 12 回定期演奏会最終ステージで丸山薫先生の詩「帆船の子」、「昼の海」、「鯨を見る」、「舵輪」、「風」を歌った男声合唱組曲「点鐘鳴るところ」(石田一郎作曲)が演奏されている。ちなみに、『丸山薫全集 5』所収「点鐘鳴るところ」(p.385-p.393)には練習船での詳細な記述がある。

また、1977 年 2 月 19 日第 13 回定期演奏会で伊藤整作詞、多田武彦作曲の男声合唱組曲「雪明りの路」が演奏されているが、そのパンフレットに多田氏のメッセージが記されていた。貴重だと思うので、資料 1 に示す。

さらに付記するが、丸山薫先生は「伊藤整詩集『雪明りの路』(『丸山薫全集 5』所収 p.375)で、「その詩の一句一句のあはひにも雪の匂ひが込み込んであるやうに思はれるのです。末枝的表現のみはしつてほんたうの詩をば失つた、否始めからそんなものは有つてゐないと云ふやうな顔をした新人とか云ふものゝ間に、眞に自分の郷土ののすたるじあの上に魂をばはぐくみ育てた君のやうな人の出現をば、心から懐しく思ひます。」と記し、巻頭序の一節に対して、「讀んでゐて私も臉の熱くなるのを覚えました。」と評されている。

## 5. おわりに

拙稿をまとめるにあたり、愛知大学男声合唱団 OB の皆様とのご縁に感謝している。しかし、残念ながら同窓会でも連絡先がわ

からず、お話を伺うことができなかつた方がいらっしゃる。定期演奏会等の録音テープやパンフレット等をお持ちの方もいらっしゃるはずである。それらは愛知大学にとって学生サークルの活動を示す貴重な資料であると思う。ぜひ愛知大学東亜同文書院大学記念センターにご連絡くださりたく願うばかりである。

1976年11月15日に豊橋勤労福祉会館で愛知大学創立30周年記念演奏会が開催され、二期会会員荒道子氏が丸山薫先生作詞、山田昌弘氏作曲「雨ふり花」と「遠い花火」を独唱されているが、音源があればぜひ聴いてみたい。

ところで、丸山薫先生が眠る正太寺の大河内悟道ご住職に確認したところ、2023年10月21日に50回忌を迎えられるとのこと。女声合唱団OG会として何かしらの形で「梢の歌」を合唱できればと思っている。

## 謝辞

拙稿のきっかけをくださった清水宏子氏、貴重なお話をしてくださった池場道明氏、勝野正彦氏、鈴木正隆氏、中内康博氏に心より感謝申し上げます。また、男声合唱団ふんけんクラブの富田直人事務長から『豊橋合唱協会40周年記念誌』等をいただきました。誠にありがとうございました。そして、資料確認にご協力くださった愛知大学東亜同文書院大学記念センターの伊藤綾子氏、佐原陽子氏に深く感謝いたします。

## 参考文献・引用文献・参考資料

桑原武夫他編『丸山薫全集 1~5』角川書店  
1976年~1977年  
岩本晃代・安智史編『新編丸山薫全集 6』

角川学芸出版 2009年

丸山薫『蟬川襟記』潮流社 1976年  
愛知大学丸山薫の会編『丸山薫の世界  
(丸山薫作品集)』2017年

潮流社編『四季 終刊 丸山薫追悼号』潮流社 1975年

鈴木暁世「『あいるらんど』とはどこのこと? - 変奏される丸山薫『汽車に乗って-』」2017年

<http://doi.org/10.24517/00050861>

久野かおる「丸山薫先生を偲んで一師の印象と学生への温情」愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『同文書院記念報 VOL.29』所収 2021年

愛知大学女子短期大学部「昭和39年度愛知大学女子短期大学部 入学案内」

合唱団しじゅうから編『豊橋合唱協会40周年記念誌』1998年12月25日

中内康博「愛大資料館へ提出する男声合唱団の資料目録」2016年7月15日

「愛知大学合唱団のあゆみ-資料展示会-」パンフレット(明豊ビル2階展示会場) 2017年3月11日~25日

「愛知大学男声合唱団第1回定期演奏会パンフレット・CD」(豊橋市公会堂) 1964年10月31日

「愛知大学男声合唱団中津川演奏会 CD」(中津川市立東小学校) 1965年9月4日

「愛知大学男声合唱団岐阜演奏会パンフレット」(岐阜市公会堂) 1965年9月5日

「愛知大学男声合唱団第2回定期演奏会パンフレット・CD」(豊橋市公会堂) 1965年12月12日

「愛知大学男声合唱団第12回定期演奏会パンフレット」(豊橋市民文化会館)

1976年2月22日

「愛知大学創立 30 周年記念演奏会パンフレット」(豊橋勤労福祉会館大ホール)

1976年11月15日

「愛知大学男声合唱団第 13 回定期演奏会パンフレット」(豊橋市民文化会館)

1977年2月19日

**久野 かおる (くの かおる)**

昭和 62 年 愛知大学文学部文学科国文学専攻卒業

昭和 63 年 愛知大学文学部文学専攻科国文学専攻修了

平成 10 年 愛知大学大学院文学研究科日本文化研究コース修士課程修了

平成 13 年 愛知大学大学院文学研究科日本文化研究コース博士課程満期退学

令和 4 年現在 学校法人茶屋四郎次郎記念学園 東京福祉大学名古屋キャンパス留学生日本語別科主任講師

**資料 1 「愛知大学男声合唱団第 13 回定期演奏会パンフレット」より**

愛知大学男声合唱団第13回定期演奏会おめでとうございます。

戦後、日本の合唱界には、幾多の変遷がありました。愛知大学男声合唱団は、創立以来30年間、合唱の火を絶やさず、今日まで活躍し続けてこられました。これは何といってもすばらしいことだと思います。

人間は、長い歴史の中で、祈ったり、歌ったりして来ました。身体一つで荒野にほうり出されたとき、沢山の人が合唱をしてお互いを勇気づけました。私たちは、きらびやかな美しさと同時に、こうした苦しさの中からにじみ出る音楽の力強さや尊さをも忘れてはなりません。

こうした意味からも、今後益々のご活躍を期待します。また学生時代のみならず、卒業されてからも、音楽のすばらしさを忘れずにがんばって下さい。

演奏会のご成功と、今後のご発展を、心からお祈り申し上げます。

作曲家

表 1 「丸山薫先生の詩の楽曲」

丸山薫先生の詩	作曲者	備考
日本歌曲「祈禱歌」	石桁真礼生	
「未来の星」	牧野統 (下総皖一 編曲)	第 21 回 1954 年度 NHK 学校音楽コンクール高校の部課題曲
混声合唱曲「瞬間(とき)はめぐる」 1. 「北の春」	古瀬徳雄	
「海風」	中島恒雄	1965 年度第 18 回全日本合唱コンクール混声課題曲
混声合唱組曲「さとじ」 1. 「桜」	宮地良和	
合唱組曲「未来へ」 終章「未来へ」	すぎやまこ ういち	1985 年第 38 回全日本合唱コンクール全国大会大学の部(東京工業大

		学混声合唱団コール・クライネス)
<b>男声合唱曲「ふるさと」</b> 6. 「郷愁」	磯部俣	「郷愁」は第32回1965年度NHK学校音楽コンクール高校の部課題曲
<b>男声合唱組曲「航海詩集」</b> 1. 「キャプスタン」 2. 「船おそき日に」 3. 「コンパスづくし」 4. 「わが窓に」 5. 「帆船の子」	多田武彦	1965年9月4日愛知大学男声合唱団中津川演奏会、同年9月5日同団岐阜演奏会で「わが窓に」「コンパスづくし」演奏。1965年12月12日愛知大学男声合唱団第2回定期演奏会で「キャプスタン」「コンパスづくし」演奏。「わが窓に」「帆船の子」は早稲田大学グリークラブ創立100周年記念演奏会でも演奏された。その後、多田氏は増補改訂版を作成された。
<b>男声合唱組曲「北国」</b> 1. 「お山の学校」 2. 「お月様」 3. 「白い自由画」 4. 「まんさくの花」 5. 「山の唄」	多田武彦	1965年12月12日愛知大学男声合唱団第2回定期演奏会で「お山の学校」「お月様」演奏。
<b>男声合唱組曲「北国・第二」</b> 1. 「雪がつもる」 2. 「手風琴と汽車」 3. 「母の傘」 4. 「北国」 5. 「氷雪に佇つ者」	多田武彦	
<b>男声合唱とピアノのための「三つの時刻」</b> 1. 「薔薇よ」 2. 「午後」 3. 「松よ」	三善晃	1963年早稲田大学グリークラブの委嘱、同年12月7日同団第11回定期演奏会初演、「松よ」は2016年度第69回全日本合唱コンクール男声課題曲
<b>男声組曲「點鐘鳴るところ」</b> 1. 「帆船の子」 2. 「昼の海」 3. 「鯨を見る」 4. 「舵輪」 5. 「風」	石田一郎	1960年6月磯部俣氏の指揮で早稲田グリークラブ初演。1976年2月22日愛知大学男声合唱団第12回定期演奏会で演奏。
<b>男声合唱アンソロジー「新しい時代に」</b> 1. 「新しい時代に」	信長貴富	
<b>男声合唱とピアノのための「わが詩友」</b> 2. 「詩人の友」 4. 「新しい時代に」	信長貴富	

<p><b>男声合唱とピアノのための「さびしい宇宙」</b></p> <p>1. 「さびしい宇宙」 2. 「ほんのすこしの言葉で」 3. 「花の空想」</p>	<p>山下祐加</p>	<p>埼玉県立川越高等学校音楽部 0B 会が第 70 回定期演奏会記念事業で委嘱、2021 年 7 月 24 日第 71 回定期演奏会初演、2021 年度第 64 回埼玉県合唱コンクール自由曲で「さびしい宇宙」演奏。</p>
<p><b>「さつきとなれば」「汽車に乗って」「香気」</b></p>	<p>不明</p>	<p>2017 年 3 月 25 日「前川健生第三回 テノール・コンサート～春の三河に寄せて～」で演奏</p>
<p><b>「丸山薫の詩による二つの歌」</b></p> <p>1. 「汽車に乗って」 2. 「冬の夢」</p>	<p>中西覚</p>	
<p><b>「まんさくの花」</b></p>	<p>下総皖一</p>	<p>1956 年度第 9 回全日本合唱コンクール女声課題曲</p>
<p><b>「雪の幸福」</b></p>	<p>佐藤眞</p>	<p>1961 年度第 14 回全日本合唱コンクール女声課題曲</p>
<p><b>女声三部合唱曲「鶴の葬式」</b></p>	<p>水野七星</p>	<p>1993 年度神奈川芸術祭第 16 回合唱曲作曲コンクール第 3 位</p>
<p><b>女声合唱とピアノのための三つの情景 冬の夢</b></p> <p>1. 「雪がつもる」 2. 「冬の夢」 3. 「北の春」</p>	<p>平野淳一</p>	
<p><b>女声合唱とピアノのための海の比喻</b></p> <p>3. 「帆船の子」</p>	<p>信長貴富</p>	<p>愛媛で活動する「ザ・シーブリーズ」により委嘱、2011 年初演</p>